

個人の金融資産

稲宮 健一

最近の新聞によると、日本の個人の金融資産は二一四一兆円とのこと。財務省が国の予算が赤字なので、財政の健全化のため暗に増税を仄めかすと、元財務官僚の高橋洋一氏が、総ての国富に目が届かない財務官僚は狭い範囲での考察しかできないので、このような発想になる。国全体で見ると、短期間の財政の赤字は全く問題ないと突っぱねる。

ここに二〇二一年の金融資産の内訳の日米比較データがある。日本は五五%が預貯金、米国は十一%、株式・債権は十五%と五十三%で、資産の内容が大きく異なる。もう一つの特徴は二〇〇〇年を起点とした十年後の資産総額は日本が一・四倍に対して、米国は三倍に達している。まさに、「失われた三十年」である。ガラ携と言われた音声電話に文字情報が送れる機能を可能にしたのはNTTだった。それを横目で見ていたアップルがウォークマン同様な品質の音楽、さらに画像データを送らせるようにした。そしていにパソコン同様な機能を実現しスマホと言う別次元の端末を創り出した。官僚組織のNTTに携帯電話に楽しさとか、次元の違った便利さ、ポップカルチャーや、漫画を組み込む発想の主導権は握れなかった。

預貯金の五〇%強ということは、正にタンス預金と同じだ。手応えのある利子も払えない銀行はタンス預金を助長させている。即ち、資金を活用して経済を成長させることをさぼっている。そう言う活動しなかったのは高度成長後の制度疲労が長く続いたためかもしれない。タンス預金は色々使い道があったはず、例えば光合成の原理の解明に投資するとか、アンモニアの製造に触媒を使った本場の省エネ、CO₂の削減に寄与するとか、これらは一〇年か二〇年後に大きな成果が期待できるが、短期の企業業績には結び付かない。本当に実現したら、人類の生存に限りない寄与をする。タンスに寝かしておくよりはるかにお金の賢い使い道だ。政治家にその素晴らしがわからないのか。出よジヨブス！